

この本を薦めます

学会誌前編集委員長 佐々木 葉

第 21 回



篠原 修

日本土木史編集特別委員会委員長
東京大学名誉教授

『明治以前日本土木史』の流れを汲む『日本土木史』の最新版の編集委員長である篠原先生に、知の革新をなした人たちの名著をご推薦いただきました。

土木の技術、学術、事業と仕組みを包括する通史である『日本土木史 1991〜2010年版』が学会100周年にあわせて刊行される。その大部の編集責任者の篠原先生は、土木の景観デザイン分野の開拓者の一人でもいらっしゃる。広範かつ膨大な読書から、今回は古典的名著をあげていただいた。

まずは河合隼雄『ユング心理学と

仏教』。景観研究のヒントを得たいと心理学と精神病理学の本は多く読んだが、なかでもユング心理学は面白く、その日本の研究の草分けである河合氏の本の中では、やはりこれが名著ではないかとおっしゃる。特に仏教をこのように論じた人はこれまでにいなかったのではないか。その視点と論考が、海外での講演用原稿ということもあって平易に説かれて

いる。



SHINOHARA Osamu

1945年神奈川県出身。1971年東京大学大学院修了。アーバンインダストリー、東京大学農学部林学科、建設省土木研究所等を経て1991年東京大学大学院社会基盤学専攻教授。現在はNPO法人GSデザイン会議代表などを務める。

次いで『三四郎』。篠原先生の漱石好きは有名だが、ベストはやはり『三四郎』。その理由は、登場人物が多くしかも皆個

性的、性格描写が深い、文明批評もある、ほのぼのと明るい、新聞連載小説という制約のなかでの構成の巧みさ、なにより女性の心理が実によく描かれている。つまり小説というものの完成度が非常に高く、現在読んでもきわめて面白い、と褒めちぎっておられた。最後は正岡子規の病床で綴られた2冊。脊椎カリエスを患い、堪え難い苦痛に苛まれながらも毎日文章を書き続ける、その精神力と気力に感服しての選定である。書かれている内容がごもつともということもあるが、それ以上に子規という人の本質的な明るさと恵まれた交遊が、この2冊からありありと感ぜられる。篠原先生は素山という俳号で句をつくら

る。子規は近世のものであった俳句を、近代そして現代へ通じる文学へと再生させた。その子規の人となりとは人生は病床で綴られた言葉に集約されている。それぞれの本について伺った後にこれらに通じるものは何でしょうとお尋ねすると、一瞬沈黙された後、その時代においてまったく光が当たっていないかったものを未来に通じるものへと開拓した、ということかな、と誠に鋭いお答えをいただいた。革新的なものを過去の蓄積から飛躍させる仕事をなし得た先人の名著。高度成長期に景色を景観工学へ展開された篠原先生ならではのセレクトといえましよう。

ユング心理学と仏教
河合隼雄：岩波現代文庫

三四郎
夏目漱石：
漱石全集 岩波書店

墨汁一滴
正岡子規：岩波文庫

病床六尺
正岡子規：岩波文庫